



JICAボランティア事業の一環として開催したサッカーイベントで地元テレビ局の取材に応じる草間さん(左)

ロシア語を生かして 現場に根差した協力がしたい

アジアとロシア、ヨーロッパの間に位置する中央アジアのタジキスタン。JICAタジキスタン支所の草間佑子さんは、現地の人たちと意見交換をしながら、インフラ整備などに取り組んでいる。

母国に帰らない人々

中学1年生の時、親の仕事の都合でアメリカで暮らし、現地の学校に通いました。私のクラスには、イラン、ナイジェリア、ルワンダ、北朝鮮など世界各地から学生が集まっていたのですが、帰国の日が迫ってきて、特に仲の良かったイラク人の3姉妹にこれからどうするかを聞いてみました。すると、「国に戻っても生活が苦しいのでアメリカに住み続ける」と。他のクラスメイトも、ほとんどが同じ答えでした。

母国であるにもかかわらず、彼らが戻りたくないという国はどこなところなのか。そんな疑問がずっと消えず、大学時代は紛争問題の解決や難民の保護などに必要不可欠な国際法について学びました。そこでさまざまな国の現状や課題を知るうちに、国際法の理念の実現に貢献したいと思うようになり、国際協力の道に進もうと決めました。

悔しさをバネに ロシア語を学ぶ

就職1年目、中央アジアのウズベキスタンで7カ月間研修を受けました。旧ソ連時代の影響で制限されていた企業の経済活動の活性化に向けて、日本人専門家と倒産法の整備に取り組みました。独立から試行錯誤しながら歩みを進めている中央アジア諸

国が、これからどうなっていくのか強い関心を持ちました。

帰国後は、東京農工大学をパートナーとして、ウズベキスタンの養蚕農家を支援する事業に立ち上げから関わることができました。その他にも中央アジア諸国への協力に携わったのですが、現地が使われているのはロシア語か現地語。言葉が通じないが故に、相手の思いをきちんと理解することができず、悔しい思いをすることもありました。そこで、この地域で広く使われているロシア語を学びたいとロシアの大学に1年間留学し、語学力を磨きました。

タジキスタンで安心して暮らせるように

2013年、念願がなつてタジキスタンに赴任しました。現地でも暮らしていると、職がないためにロシアなど周辺国へ出稼ぎに出る人がいかに多いかを実感します。この状況を目の当たりにして、かつてアメリカの学校で出会った母国への帰国を拒む友人たちを思い出しました。この国の人たちが国を離れずに暮らせるようにしたい。そう思い、日々の業務に取り組んでいます。

昨年の冬に地方の村を訪れた時、マイナス10度にもなる極寒の中、子どもたちは衣類を何重にも着込み、何時間もかけて山で薪を拾っていました。タジキスタンは国土の9割以上が山。水力発電に適しているも



JICAタジキスタン支所

草間 佑子
KUSAMA Yuko

大学卒業後、2007年にJICAに就職。地球ひろば、東・中央アジア部、ロシア留学を経て、2013年6月から現職。



甘草の採取を通じて収入向上を目指すタジキスタンの農家の女性たちと

の、冬場は水が凍ってしまい、十分に発電できていなかったのです。

全ての人たちが、冬でも暖かく暮らせるようにしたい。そこで新たな発電施設や送配電網の整備に協力できないか、現地の電力大臣らと協議を進めています。「日本の協力は時間がかかる」と言われてしまうこともありますが、その分入念に調査を行い、確実に成果を残す事業を目指していると説明しています。

ここで役立つのが、これまで苦労して勉強してきたロシア語。通訳を介さずに行政官や住民たちと会話ができることで距離が縮まり、信頼関係につながっているような気がします。

これからもタジキスタンの人々に寄り添いたい、現場のニーズに応える協力をしていきたいです。